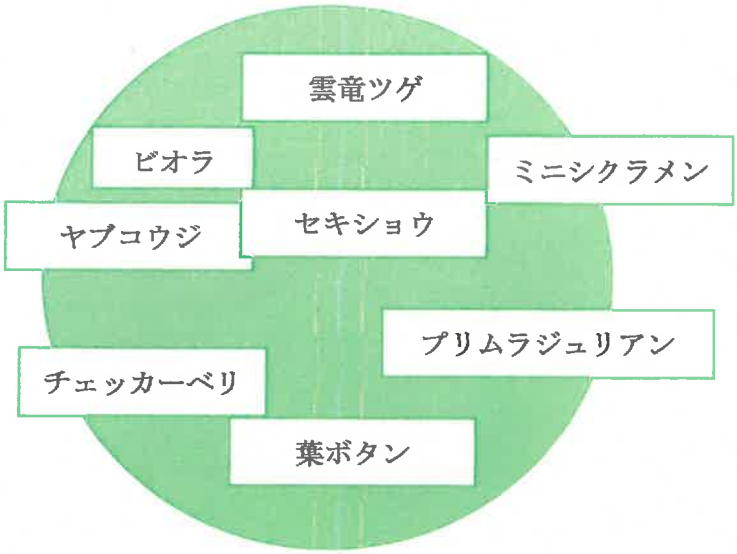
お正月の寄せ植え

12月3日
岐　阜　南
エリア委員会



花材

- **雲竜ツゲ：モチノキ科**
  幹がくねくねとねじれながら成長していく品種で個性的です。
  ツゲの一種なので性質も強く、耐寒性、耐暑性にも優れている品種です。
- **ヤブコウジ：サクラソウ科**
- 自生地では日があまり当たらない林床に生えるので、庭植えにする場合は、極端に乾燥しない水はけのよい半日蔭で栽培します。
- **ガーデンシクラメン：サクラソウ科シクラメン属**
  大型のシクラメンに比べると、耐寒性が強く耐暑性もやや強いので屋外で比較的容易に育てることができます。寒さより暑さに弱いので、夏は明るい日陰や半日蔭になる所が最適。
- **ビオラ：スミレ科**
  冬から春まで長く咲く春のガーデニングには欠かせない一年草。酸性土を嫌う。
  花柄摘みをこまめに。
- **プリムラジュリアン：サクラソウ科**
  霜の当たらない軒下で管理しましょう。咲いている花の影になっていると、蕾が咲かないでしおれるので、花は早めに摘んでいくのが、長く花を楽しむコツ
- **葉ボタン：**
  キャベツの仲間。アブラムシやアオムシ、ヨトウムシなどの害虫に注意してください。
- **チェッカーベリー：ツツジ科**
  湿り気のある冷涼な気候を好み、高温多湿や夏の強い日ざしを嫌います。耐寒性は強く凍結に耐えますが、乾いた強い風には注意が必要です。
- **セキショウ：ショウブ科**
  水辺に自生している植物なので、半日陰で水を切らさずに育てます。

こんな水やり、
していませんか？

「園芸は水やり３年」といわれるのはどうして？
水やりって、そんなに難しいの？……そうなんです。
水の与え方ひとつで、同じ植物でも生育がまったく違ってくるんす。
特に夏は、水やりで植物の生育に大きな差が出る季節。
今さら聞けない素朴な疑問から、知っておきたい肥料とのかねあいまで、水やりの基礎をとことん勉強しましょう！

×　表面が乾いていない鉢への「ついでやり」はダメ！

◎　「乾いたらたっぷり」の水やりで、根がよく張ります

鉢やプランター植えの水やりの基本は、「土の表面が乾いてきたら、午前中に鉢底から流れ出るほどたっぷり与える」です。
鉢土の表面が乾くのを待って与える理由は、根の張りをよくし、根腐れを防ぐためです。
一鉢一鉢確認し、乾いている鉢にだけ水をやるようにしましょう。

×　受け皿に水をためてはダメ！

◎　鉢内に新鮮な空気を取り入れる必要があります

水やりは、新しい空気を鉢内に送り込む大切な働きをします。
鉢土の表面が乾いていないのに毎日水やりをしていると、じめじめして酸欠状態となり、生育が悪くなります。

受け皿に水をためる「腰水」は、水生植物など常に湿った環境を好むもの以外はおすすめしません。

×　「チョロやり」はダメ！

◎　老廃物や停滞した栄養分を洗い流す必要があります

水やりは、鉢内の古い空気を入れ替えるだけでなく、植物の根から出た老廃物や余分な肥料分を洗い流す役割を果たします。
植物が吸収しきれない肥料分がたまってくると、根を傷めたり、鉢内の栄養バランスがくずれて生育が悪くなるからです。
最悪なのは、鉢底から出ない程度の「チョロやり」です。これを繰り返すと、老廃物などが鉢底にたまるだけでなく、底部の根はダメージが大きく、根の活力が低下し、ひどいときには根腐れを起こします。

…今さら聞けない基本の「き」…

皆さんの素朴な疑問に答えます

Q　「夏の水やりは午前中に」とよく聞くけど「午前中」って何時までを指の？

A　夏の「午前中」は、遅くとも朝10時まで、と覚えましょう

夏の朝10時の気温を知っていますか？
8月の中濃地方では、朝10時に各地で25℃をほとんど上回っています。水やりは、気温が25℃を超える前、できれば朝9時ごろまでに行ってください。

Q　朝は忙しいから、夜、涼しくなってから水やりをしているんですが…

A　植物は朝育つ！

夜だけの水やりを続けると、間のびした株になってしまいます。
植物は、地温が上がる前の朝に水を与えることで、根から水と養分をぐんぐん吸収して光合成を活発に行い、丈夫な株に育ちます。

Q　暑いときは頭からシャワーをかけると植物も気持ちよいのでは？

A　日中の葉水は厳禁です！夕方まで待って行いましょう。

シャワーのように頭から水をかける「葉水」、植物にとっても涼しくて気持ちよさそうですね。でも、日中に行うのは逆効果です！　真夏の日中の葉水は一瞬の涼で、そのあとが大変なのです。

日中は葉の温度と水の温度が違いすぎるため、葉に斑点ができることがあります。また、シャワーのように葉にかけた水は土にもかかり、一時的に土の表面の温度は下がりますが、すぐに地温が上がって根が弱り、根腐れの原因にもなります。

Q　園芸書によくある、「控えめに」「乾かし気味に」という表…これって水の量のこと？

A　水やりの「間隔」のことを指します。一回にやる水の量は同じです。

水やりを控えめに、といわれると、鉢土の表面をぬらす程度に少量の水を与える、と誤解する人がいるかもしれませんが、前述のように「チョロやり」はご法度です。

季節によって変わるのは、一回の水やりの「量」ではなく、

水やりをしたあと、次の水やりまでの「間隔」です。
基本はあくまで、「鉢土の表面が乾くまで待ってから、たっぷり与える」です。
「控えめに」「乾かし気味に」と書いてあったら、鉢土の表面が乾いてきたなと思っても、さらにもう一日くらい待ってから水やりするとよいでしょう。

水やりと切っても切れない

土と鉢のはなし

土について … 土は自分でブレンドしましょう！
(基本は赤玉土(小粒～中粒)6:腐葉土 4)
水はけのよい乾きやすい土は、水やりの回数も多くなり、新鮮な空気を取り入れやすく、「水やり上手」への近道です。
市販の草花用培養土は多数売られていますが、水はけのよい土をつくるには、自分でブレンドするのが一番。まずは自分で混ぜてみることです。
初心者でも失敗が少ないおすすめのブレンドは、赤玉土(小粒～中粒)6 と腐葉土 4 の配合に、根張りをよくする粒状の緩効性化学肥料を混ぜたものです。

鉢について … 乾きやすい小さめの鉢で、
こまめな水やりが理想的！
夏の水やりの失敗ワースト 1 は、過湿による根腐れです。これを防ぐには、小さめの鉢に水はけのよい土で植えつけることです。
必然的に水やり回数が多くなり、鉢内に新鮮な空気を取り入れやすいため、根張りがよく丈夫な株に育つからです。
(ただし、乾きすぎはダメです。)